

凡例

一、本書は、江戸東京博物館が所蔵する「新古改撰誌記」(縦二二・七^セ×横一六・一^セ、縦帳)三一冊のうち巻九から巻十三までの四冊(巻十二は欠本)を翻刻したものである。

一、「新古改撰誌記」は、幕府の中間頭の勤方に関する記録であるが、これについては田原昇氏の先行研究「江戸城内の運営と「五役」―「新古改撰誌記」より」(『東京都江戸東京博物館研究報告12号』二〇〇六年)があり、本書もこれに学んでいる。「新古改撰誌記」に頻出する五役(御中間・御小人・黒鍬之者・御掃除之者・御駕籠之者)の詳細については同論文を参照されたい。

一、当館が所蔵する「新古改撰誌記」は計三二冊であるが、巻号の表記により三冊の欠本が確認される。参考のため「新古改撰誌記」の内訳を表1のように一覧する。

一、翻刻にあたっては極力原文書の表記を尊重するように努め、左記のように編集を施した。

- ① 適宜、読点「、」および並列点「・」を付した。名前や役職名・地名などが連続して出てきた場合には並列点「・」を使用した。
- ② 当用漢字・常用漢字を原則(俗字・異体字は使わない)とし、なものは正字を用いた。但し、国字がある場合には正字よりも国字を優先した。人名も同じ。

但し、躰・巾・杯・惣・炮・扣・坐・簀・儘・附・寐・釦・鞞などは原文のままとした。

「せがれ」は「倅」、面積・容積の単位の「夕」は「勺」、「けんか」の「咄」は「嘩」、「みのがさ」の「蓑」は「蓑」を使った。「抛鞘」のように「なげる」は「抛」を使った。

- ③ 衍字はそのまま表記し、右傍に(ママ)を付した。当て字・誤字は右傍に(ママ)あるいは(何カ)を付した。正しい字がわかる場合は右傍に(何)と記した。また脱字がある場合は同様に「何脱カ」と傍記した。いずれも同一巻においては初出のみとした。なお、以下の頻出する当て字は原文書のままとし、傍記も略した。

已(Ⅱ以下)已前・已来・已上、簾々(Ⅱ廉々)、奇特(Ⅱ奇特)、性(Ⅱ姓↓百性・性名)、情(Ⅱ精↓出情)、訴詔(Ⅱ訴訟)、操(Ⅱ繰↓操上・操合など)、太鞞(Ⅱ太鼓)、茶椀(Ⅱ茶碗)、丁(Ⅱ町)、挑灯(Ⅱ提灯)、町銘(Ⅱ町名)、篇(Ⅱ遍)、堀(Ⅱ掘)、屋舗・屋舗(Ⅱ屋敷)、曆(Ⅱ歴)、録(Ⅱ録↓元録・永録)、抱(Ⅱ拘かかわる)、

- ④ 片仮名はそのままとし、変体仮名は同音の平仮名に改めた。

但し、ニ・而・者・江・茂・与・而已・并はそのままとし文字ポイントを下げ右寄せした。漢字の「得」「之」および平仮名の「あ」「ゑ」もそのままとした。

- ⑤ 合字(方など)は平仮名に改めた。
- ⑥ 文中に記載されている年号・干支や諸々の数字・数値並びに役職名や続柄などは原文のままとした。

但し、年号と在職者が一致しないような誤記と史料される場合には該当箇所へ修正のルビを付した。

また、△は「合計」の意の場合のみそのままとし、「締」「貫」の意の場合はそれぞれの漢字で記した。

- ⑦ 欠損、または判読不明の文字は、□□…(字数分)、「」(字数不明)で示し、蝕損などは右傍に(虫損)(破損)などと記した。
- ⑧ 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」を用いた。大返し「く」は仮名および仮名と漢字まじりの時に用いて、漢字だけの場合には「々々」を使用した。

- ⑨ 原文中の行間の補記は、原則として本文中に繰り入れた。

- ⑩ 抹消は原則二重線||で付した。

但し、本文内に他の抹消表示がある場合は、それを生かした。本文内にある抹消表示は字配りと同じ位置に同じ表示で記載した。

また語句の見せ消子は正しい語句にて表記した。

- ⑪ 意味不明箇所については、右傍などに(ママ)を付した。

- ⑫ 印章は実際に押印されているものは㊦と表記し、文字で印と記されている場合はそのまま「印」と表記した。

- ⑬ 朱書は該当箇所を「」で括り、右傍肩に(朱書)と記した。朱引きは右傍肩に(朱引)と記した。

また、(朱書)(朱引)などが同一の項目・箇所で大量に記載される場合には表示の煩雑を避けるために、その冒頭に注意書き

を付して(朱書)(朱引)の表示を省略した。例示は次の通り。

例 「注 この項目で多数記載されている「」内は(朱書)で

あり、………を表している。ついては、表示の煩雑

を避けるために(朱書)の表示は省略した。」

- ⑭ 原則として台頭は三字あけ、平出は二字あけ、罫字は一字あけとした(数文字にわたる罫字の場合も一字あけで統一した)。

そのほか、日付や人名・役職名などが明確でなく空欄表示にしている場合は、日付は一字あけとし人名・役職名の場合は二字あけとした。

- ⑮ () のないルビなどは、原文書に振られたものである。

- ⑯ 人名で同一人にも拘わらず「嘉右衛門」と「加右衛門」などの混用が見られるが、統一せず、また「右衛門」と「左衛門」の様に「左・右」の混用も見られるが原則統一せず、これらはいずれも原文書の表記通りとした。

但し、役職者ではつきりわかる者は該当箇所へ修正のルビを付した。

一、巻末の人名索引の作成にあたっては、小人・中間などのように本来役職名に冠すべき「御」を原則として省略した。

一、本書の編集は東京都江戸東京博物館学芸員木村早霧・田中実穂が担当した。なお、翻刻にあたっては江戸東京博物館友の会館蔵古文書翻刻プロジェクトの左記メンバーの協力を得た。この方々の協力がなければ本書は完成し得なかった。記して感謝したい。

石本礼二 加藤喜代子 齊藤紀子 笹原一徳 高澤金吾
新倉隆一 本庄文江 宮 俊

(令和六年三月)